



門 亦 2  
號 4747  
卷

~~加 2  
號 666  
卷 2止~~



言靈或問

或人言海の傳り言靈の教をいふ故あるは  
言曰け言靈の教を上古 ミコトノ 皇國の言靈の道といふは  
如し 法別ありて是別 吾皇のありての教也

又言言靈と云ふは族の法別をいふ故也  
言曰即 やつれ 僕々傳承する言靈と云ふは皇統と云ふ

又言言靈と云ふは皇統のけりるる言靈也  
言曰是人の声乃 なごい 靈也又人を治す声也  
其声毎声義理傳る言靈也  
かく一声毎言靈ありて是と二声之聲也

に声の聲を能はしめる時ハ千万の意となり詞を  
なりて世の物もつひにさしたるなりぬく又さして  
そなたとありぬる一統して又さすは是なり動成  
極一とのハ是も貞後也

又同さる貞後とはつるなり也

昔曰是人の声此後なり又声は音韻の<sup>ひび</sup>なり  
ありては声の物も所を音といひ声の物もと韻と  
いふ別音は皆中重の位備へて音と也又韻は  
高低の次第立てて又韻とるは此音と韻と相結く  
七十八音と名をなり統して音は十五声は相集

極小音と大極と有り又韻は十五声は相連り  
響も<sup>なり</sup>響くも大極とるは此音と韻との大極大極は  
小お費く一下面の<sup>つら</sup>後とるは是を是と名を是も貞後と  
いふは貞後の内は天地物の法備り極事  
物<sup>たい</sup>神用自他内外四方八隅一<sup>ぐ</sup>九の形ふり是を  
是と名を是なり是を志く備ふるといふなり  
かく響るは抑後を是即吾皇國の<sup>のり</sup>韻の道也  
いふく法別と名なりぬる也  
又同上古音響も貞後なり一<sup>た</sup>後あり也  
昔曰日本書記系葉集等子と名を明るるなり

別集葉集小「志」の「海」の「也」と此の「也」といふ所の

「た」の「あ」は「ま」の「か」をいふ

とあり是の「皇國」をいふ所の「た」をいふ所の

「や」の「の」は「み」の「り」又「言」は「其」の「ち」

に「占」と「占」正「片」の「色」妹「の」なり

とあり是上古の「言」をいふ所の「言」をいふ所の

「多」は「次」は「口」は「神」は「也」は「白銅」

鏡「第」は「十」の「母」真「皇」は「鏡」又「出」は「の」國「遠」は「神」は「白銅」

麻「蘗」は「比」乃「大」御「鏡」又「第」は「十」の「母」真「皇」は「鏡」又「出」は「の」國「遠」は「神」は「白銅」

是の「言」は「鏡」をいふ所の「言」は「鏡」をいふ所の

鏡の「言」は「鏡」をいふ所の「言」は「鏡」をいふ所の

其の「言」は「鏡」をいふ所の「言」は「鏡」をいふ所の

即昔「皇國」をいふ所の「言」は「鏡」をいふ所の

言「言」と「言」は「鏡」をいふ所の「言」は「鏡」をいふ所の

又「同」は「言」をいふ所の「言」は「鏡」をいふ所の

「言」は「言」をいふ所の「言」は「鏡」をいふ所の

昔曰「其」は「言」をいふ所の「言」は「鏡」をいふ所の

「言」は「言」をいふ所の「言」は「鏡」をいふ所の

人「と」は「言」をいふ所の「言」は「鏡」をいふ所の

何「の」は「言」をいふ所の「言」は「鏡」をいふ所の

今付云々我知の時を必視の故申と亦一且  
□□□□  
てふをばの二十声各一声毎不靈備く自然神用の  
日かち我なるをの我亦人又他視の之也急すうたふ  
と始え蓋即既寧恰等とて云々の他を以ふ  
知の如るる類

又同或人乃之は必視の故申我亦人たれ  
さて春と夏と秋と冬とありては必視の故申と  
池と山と川と其必視の故申と知く何の  
あるも亦一也

昔曰我亦不依て必視の故申我知時を自然  
天地の遠を以亦一且物の必其知く亦知也  
凡世の中に物有きは程あり程有れり則必其  
必あるは必其申有されん其亦申と知時を必  
知く亦其知く亦其知く亦其知く亦其知く  
皇國の教の元なりとて今外國の教を知く  
吾亦其教の教を知く亦其知く亦其知く  
亦其知く又漢上の文字との之を我りといひ  
用る所の教の教を知く亦其知く亦其知く  
亦其知く亦其知く亦其知く亦其知く

此と号し一々解中後亦入るるも中尋ねたる  
是れを不唯ふ心乃人なり志の如く後者の道と云ひ  
ゆふもいとまきなるかの也もくも人と生れて何れ  
亦しもく令死なむゆいともるれりなま  
多敷し皆能合と求むて令と條<sup>たがひ</sup>終るまも生きた  
能ふ解る思ふもしけつと能て志不此のあぶし  
人と生れて何の功もく唯も後以後の能て一世と  
解るもゆゆに由りも苦<sup>ひ</sup>し能て實不唯も後  
限りなきはいつのも志を能く後持たしゆゆの  
又同志能く後持となぬゆゆの能りゆ

善日志と能く後持となすの爲能えとせざ  
唯名の爲國の由能ふ志と云ふも今か来けれ  
御代不<sup>ま</sup>まきてと能の御能思入唯己の能  
かしとと苦えし能と弱ぬもまふまきし能の心  
つらふ也史御代乃有る能と思し何ゆふまき  
志の爲國の由の志と云ふも也能由能人ゆ  
別國の室也又能に能人ゆは即家の由の  
なき何ゆ能ゆゆも志と能ゆゆも時  
其人ゆの力能の功能ゆゆの也志ゆゆと能と能  
ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ



—の必を豫して終る母の足ははしむるものありん  
てんてゆく<sup>うらた</sup>心乃人を脚に得ぬものありて自悟  
心おきて人をん下—又是に子獨る人つ成る時を  
是と悟りて明らくふと人と縁きもの也是皆<sup>た</sup>心  
心の痛めを—他をの人はは病をなすの也此は  
け之臺の教を上古の神教の—て吾皇國そのひの  
要するものは是と答ふもといひありんていふ、あ  
—

又同上古の教と之系を今世の國を認む。是と  
是なるあり

昔曰<sup>ち</sup>の傳れる所えより是國を也と世と近世のふ  
こいよ、言をとも知ん—て吾皇國の祠と解又漢土  
我の行を記す—て吾皇國の神書を説くとの類とい  
たふするや、是て神皇の所を也と云ふて—  
わん—のちこれいふ言を知ん—て、其の神神亦人  
か—れ也也

又同ふら—は—を云ふて神神と云ふ世—  
事と得く軍人なり也

昔曰神書のひは櫻木唱—か—のたれも此言  
靈なるては<sup>ひやうり</sup>表裏費<sup>せんつ</sup>通—て解くは、いと云ふ脚





天降るを神の以て用ひて伊弉諾の音の聲  
又瓊瓊杵尊の音の聲是也又みよみよの聲は天降  
の地の柵の下乃角り不依を承りて即神の音の聲  
是地の音の聲なりて土の变化して萬物の體となりたるを  
みよみよの聲とてこれを身とみよみよの音とみよみよの音と  
初めなりて一柱に神代是を萬物の初生不依を初  
とる一又世の之柵不依の人の之等とつらち別な國  
の音とて一柱に一の音は一朝の音とて其の  
一の音はあつた也

又同或人の音の音は神とて不依を境とて不依の  
申候なりといひて其の音はあつた也又其神とて不  
二声ふと云ふありて其の音の音也

昔曰神多かみの二声ふと云ふありて其の音の音と  
境の中略なりといひて其の音はあつた也其の音の音は  
出せし音の音は神代境の中略なりといひて其の音は  
神より人境を出來し物とて其の音はあつた也其の音は  
るは其の音の音はあつた也其の音の音はあつた也  
道も其の音の音はあつた也其の音の音はあつた也  
るは其の音の音はあつた也其の音の音はあつた也

去後ハ一なるれはけニ声ハは神の御まひりて  
あまの御まひりてかみの二声ハ云々成侍ある時  
御心とまふはく一と信く是をさへ一はなる也

又同吾國かみの二声ハ云々教の元と去後ハ一は  
いづるも也

答曰けかみといふ声の云々もて天地の道と云  
て神人の教と云一後ハ一なる也

又同かみの二声ハ云々人の教と云一後ハ一は  
いづるも也

答曰かみの云々云々は神物の云々云々云々

かみの云々言々云々は神物の體と云々の云々云々一也  
世の種々の物をけかみとの二つの後ハ云々云々の也  
云々云々一の云々云々は云々云々一と云々云々かみの  
二つは云々云々の云々云々云々云々云々云々云々  
時々云々云々云々又云々云々云々云々云々云々云々  
かみと云々云々の云々云々は云々云々と神といひ又國と守と  
いひ又云々の云々云々かみと云々云々又云々の云々云々かみと云々云々  
云々云々と云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々  
と云々又かみと云々云々云々一云々云々は一云々の上あり一云々云々

一村の上りや一家のしりや又親子を親と上と  
一兄弟の兄と上と下と一組の世を親と上と  
親の終て上あふたしとありや一物しとて四り又  
大つと下の形別を上と下とあて上と習の方こまはえそ  
習づらうと云沖教を即百順の身家不備を是上古  
一言ふして國家を治ちり成事なる一法の法なるを  
又同上古ふ背く極くは云一云ふ國家を治ちり  
一法の法なるを

答曰上古云皇の御ちなるを一世の法は上下の人あて  
かよみとの言はれぬ成事なるを

かよみとの言はれぬ成事なるを別又神守上の言はれぬ  
と知らぬをい神守上の言はれぬと知らぬ自然上成  
成事なるをい神守上の言はれぬと知らぬ自然上成  
又上とあてい法のえらり上とあてい法のえらり  
昔より今よりあてい法のえらり上とあてい法のえらり  
是あてい法のえらり上とあてい法のえらり上とあてい法のえらり  
たあてい法のえらり上とあてい法のえらり上とあてい法のえらり  
一法の法なるをい神守上の言はれぬと知らぬ自然上成  
是一國の法なるをい神守上の言はれぬと知らぬ自然上成  
是をい神守上の言はれぬと知らぬ自然上成

法律は別法也是一天下計道を弁入上る皆く海内  
子を知りて是は我もて上る皆く志は地内二天下  
於て何の事礼りたりは是は争礼る事別法なり是  
一國の家を法と同一し天下を法と同一し  
國家を治たりと争ふなり一法は法の志なるは  
吾皇國に於て天下の法の上を之と道とを  
争ひて神代世より志は是上古の神代天代  
法と同一し一度は教を立給ひし上る教は  
今に於て是法の上を遠くするは  
易くは是法の上を遠くするは

又同天地の道を上下を理同一し  
是唯上る利有るなり  
又用は法の法なり也  
言曰今こそ一は是は是天代大順の教なり  
國家は同一の法也  
是を是るなり  
又同世の二極とはいふなり  
言曰是天代物の二つ也又天代降る地なるなり  
地を昇るなり

又物を大地相結ぐ生るとして既に物と有りぬるは  
是たふあはれ地ふりしを生滅宗枯ら地不修集して  
新世とす。ゆるりぬるはふ是を世の之極とす。あ也

又同人此之等とはいふる。力の也

蒼白星も長民の之也又君を天の如く日月の如く  
常ふよふをて信と懐民と育むの如く日月の星君の  
職なり又民を地の如く草木の如く常ふ下は君を  
農ふ者なりと見る星民の職なり又信の中は位して  
空を農者如の如く風は雷電の如く常ふ君民の  
同の之上下は結ぐ國家を治るの如く日月の星君の  
職なりされは各分りて其ふむるは地とす。あ也  
解ふ是と人の之等とす。あはれ

又同人ふと等分——其取中をいふる。あはれ

蒼白人の之等も星君の治とつらう大甲ふして別  
而あを治るの如く是るも又之等各其職とちて分に  
在るの治し分る病ふさ家の礼し別治礼の如くあふ  
場まをさきは君ふして民の苦力くりきを棄うははふして君民の  
之を隔ててあふして君の命令を怪く其家は是を職と  
ちしてして別礼と振くなり其も修むるはあはれ  
又之等のあはれと等に分るは是異國戎狄の道也





小龍今いふ不私の臆見たぐと加へて其の身とまてし世に  
こをしはるし抱ふ近世國と習ふ如と觀み也地大凡  
そんこの後見小出く或る儒道と語又佛道と圖な一  
勸聖賢と罵のよる兒弟戦ふ紙墨を信りて  
のしうかく吾皇國ふる兒教あると示さるとの  
宗むとあつてまはあふ世の人乃為とわすめとて抱ふ  
今は侍と秘ひめきて忘るは是と知る人あらずなるば  
終ふ吾皇國の教乃大布とあふむとこのいとるが  
うらーられむ今は教とぞあはるは忘るるを定  
はまるとしと僕身わがみを束縛むすばしと終ふるは

不皇也此道なる世國よく皇國ふ輝かの力るをい志るは  
あまし今は光の塔たと詔みことして皇皇國の道此明を  
るるの成知りなるは唯ただ止とどまらばにあはれは自みづか解かと交  
心こころを起たしてさるは國の存たもつと終はるは  
是らうはあむせむ恙や長け道と語あむあは  
そ時再び皇國の道と語しん光輝乃まとなりまむ  
そのとるは庭にわより包かく志行るんはけくはるるを  
いぬ

又同じ道とあふは身あり也

答曰上古のころは知りたれし今僕が侍るるをい

と云ふは是をゆれば身と云はば後の事と云ふは  
らゆく又事ゆふ事ゆひつゝ事ゆふことゆふはとん

○ 始ふ云々或教ふは教のたふして是と傳ふれば  
事ゆふことゆふ事ゆひつゝ事ゆふことゆふはとん

はるなり

○ 次ふ真因縁と教ふは人の声此縁を云ふ音の  
のよりゆふて別詞の道と云ふことゆふはとん

○ 次ふ詞の道此教ふは吾皇國の詞よは大道こぢ  
のよりゆふて是と云ふ九條ふかくを御教ふことゆふはとん

○ 次ふ世詞と教ふは人すうだふ也急と始ふはとん

らうのけと免世の事と云ふは事ゆふては御申と云ふは

言詞と世の事と云ふは事ゆふては御申と云ふは

○ 次ふ枕詞のたふと教ふは上古歌よみせ一人言の  
さゆふゆひつゝ事ゆふては御申と云ふは事ゆふはとん

○ 次ふおほひと教ふは今事ゆふてはとほ也と云ふは

二声ゆふて各一声ゆふ云々或傳り別必詞と云ふは

唯事ゆふて自他神目の方と云ふはとん

○ 次ふ之程の起えと教ふは云々或傳り別必詞と云ふは  
起え歌のたふ事ゆふてはとん

セツル声の傳りし系靈の掛りたりしをさしんぬる  
又その頃流り起えしつゝ八韻之音のふる源をたてし  
別を顔相後て金セツル声をあふらるゝとさしんぬ  
又歌の起えしつゝ上右河の道向て別たれ話歌説語ワカセツゴ  
此をとるし物しを歌ふあその法のり乃立しつゝとさしんぬ  
別歌を吾皇國の教のつゝたまは唯たれくしよみ終りて  
そのころの世さしんぬ也

○むらじ於産室むらじ於胎むらじ入むらじ右白むらじの教むらじく神代むらじ巻むらじ終りては  
想むらじを國むらじ衆むらじと流むらじる教むらじく此法むらじとるし終りしよめさす  
一叙むらじ一たり流むらじふとる人むらじ兒むらじのふあは終りてはたむ

熟得の上をとりし一也

又同歌をさしんぬのつとるし終りてはたむ也

昔白昔時ハモ御むらじとりふるしを歌むらじをよみしよめさす  
よは沖製むらじと胎むらじ息むらじ子むらじ遠むらじ信むらじ等むらじ乃むらじ以むらじのむらじ氏むらじ終むらじ束むらじハをむらじ終むらじの  
歌むらじをのせしるなり別むらじけ新むらじ集むらじは初むらじも白むらじくてははけし  
あむる也此むらじあよく洞むらじひしきは悉むらじ今むらじ歌むらじよみせしとるし  
よはたむけ新むらじ集むらじハ終むらじりてはたむ

又同新集集を初もはたむお終りてはたむ  
又一系良の沖代より流の歌を次終りてはたむ  
そ一はたむあふらるゝとさしんぬ

こぞゆけ紀ものぬらむとてあはれ目ふくぬおの神  
とてうひせしむるれとすふめては新紫とよく  
洞ひくふとみなるもの也

昔曰奇を別言ふのこを心とてうらた人の道るれあはれ  
に初をのこかぶあひのほはらふとて一は初とてあはれ  
そむくまて取きうめくくかたきふふはひては流ふ  
帯の心とてうらたては初あはれあはれ人の心は  
ひもあはれとてうらたては初あはれあはれ人の心は  
悪心あはれとてうらたては初あはれあはれ人の心は  
人あはれとてうらたては初あはれあはれ人の心は

むらびや別古今集共席りもちうとてあはれ  
はちとてうらたては初あはれあはれ人の心は  
とてあはれとてうらたては初あはれあはれ人の心は  
はうらたては初あはれあはれ人の心は  
あはれとてあはれとてうらたては初あはれあはれ人の心は  
くあはれとてあはれとてうらたては初あはれあはれ人の心は  
そむくまて取きうめくくかたきふふはひては流ふ  
孫まてにはけしあはれとてうらたては初あはれあはれ人の心は  
は初あはれとてうらたては初あはれあはれ人の心は  
あはれとてあはれとてうらたては初あはれあはれ人の心は

知事ふ〜一別は果を河と云うは流して實情実原の  
歌多うれば今か〜昔時の人の子と知りて時代のよめ  
と歌ふふ思ふは是歌と書とを心と異ふふ世がれはるを  
さきはるふ。予うあひるふ歌よめをのり成歌ふふと唯  
實情実原成宗と〜はかるとは詞と云はりて實情の  
遠るをゆくふ〜なつる。これは新集のらあゆりと知  
むは思ふな〜は分僕り教へる所乃其原流をりて之  
結語のふと知し是を是結語は〜と唱らるる

又同ふふ〜系むまじの教と〜なる。教なるも  
昔白是神代巻の一傳ふ〜一別天地の塵を不依て

系物まふ。の道と〜一むじ〜のこ物と〜の今日  
小あや凡人事結用を際限を〜と〜も自他れ結ふ  
つ〜ふまは〜と〜て用結るまのあ〜をん史天地有と  
之〜も結をぶふ時を系物ま〜は結ふの終て系物ま  
又系物ま〜と〜も物と結と結をぶ〜時を〜用と〜なる  
結ふの終て〜も結はる。今け詞の道と〜をん人  
声なきや五声者〜と〜も結をぶ〜時を〜用と〜なる  
於て各詞結る。又詞の九條の内てにはけ〜えつちる也  
結〜と〜結ひのこつと〜ふこけ三條の結は調を〜ぶる時を  
ワカセツゴ  
話歌説語のふとるうんけ〜條の結は調を〜話歌説語



惣て是迄之實物をりて、  
いを占其御教を奉物寃罪乃根柢とて、  
即吾皇國の卜法うらなひのいりたの立所又醫いさの法り其能る如  
又軍いぐさの法乃出之所是迄之立所乃所なるは、  
一朝乃流落ふとて、  
と初めよ

て保内年甲午年秋九月

江戸の谷餘ヲ摺座盡舎の行々等とあり

中村主計

存道元押





